

読んでます

日本をたつとき、林彪異変を題材にしたアンソニー・グ



レー（紅衛兵騒動によって北京に二年半も監禁されたことで知られるロイター通信の記者）当時）の国際謀略小説「毛沢東の刺客」の邦訳をポケットに入れてきた。「四人

組」裁判が示した中国の政治的ドラマの再現を目の当たりにしている今日、この小説は大変面白い。

いま私は、現代中国に関する

フランスで読まれる

中国人著「毛沢東の囚人」

中 嶋 嶺 雄

る日仏共同研究のため招かれてパリに滞在しているが、こちらではパリに逃れた中国人バン・ロウワン（仏名ジャン・パスカリーニ）がライフ誌支局長ルドルフ・チェルミン

スキーの協力で書いた「毛沢東の囚人」が大ヒットしたという。この本は中国の労働キャンプの過酷な現実を描いた証言であるが、最初はアメリカ

カで一九七三年に出版され、フランスでは七五年にガリマール社から「証言双書」の一冊として出て、むしろフランスで大いに読まれている。

昨日、モンパルナスの本屋

でようやく探しあてたのは「毛沢東―聖人伝の現実」である。これはエミール・ギコワティが編んだ写真集で、四年前パリで刊行された。ユニークな中国評論で知られるシモン・レイが序文を書いている。近代中国の開幕から毛沢東の死まで、中国の実像を浮き彫りする貴重な写真を全世界から集めて解説したコレクションであり、毛沢東礼賛の通俗的な写真集とは異なっており、実に感動的かつ圧倒的である。

（東京外語大教授・国際関係論、在パリ）

（写真は中嶋嶺雄氏）